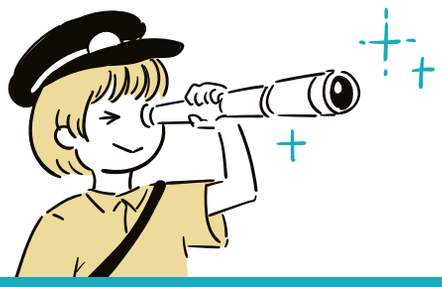
しながわ
ウェルビーイング
教育のあゆみ

令和７年度



品川区教育委員会

「しながわウェルビーイング教育」

子どもたちが自分と社会の幸福を
支える力を身に付ける

「ウェルビーイング（Well-being）」※という言葉は、さまざまな分野で耳にする重要なキーワードです。“しながわウェルビーイング教育”では、知識としてウェルビーイングを知るだけ、もしくは、心身の状態を向上させるだけではなく、自分と社会のウェルビーイングの実現に向けて、具体的に行動できる力を身に付けることを目指します。

※国の第４期教育振興基本計画ではウェルビーイングを以下のとおり定義しています。
- 身体的・精神的・社会的によい状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念
- 多様な個人がそれぞれの幸せや生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられることも含む包括的な概念

※品川区では、「区民の幸福（しあわせ）」すなわちウェルビーイングに着目し、区民の不安や不満といった「不」を解消し、多様な選択肢を提供していくことで、未来に希望の持てる社会をつくるべく「ウェルビーイング予算」を編成するなど、区民のウェルビーイング向上を推進しています。

しながわ
ウェルビーイング
教育のあゆみ

令和７年度

品川区教育委員会

目次

品川区版学びの羅針盤2030 …… 2
“ウェルビーイングの学び”の進め方 …… 4
学びへの具体的な取り入れ方 …… 6
冨士見台中学校の取組 …… 8
伊藤小学校の取組 …… 12
大原小学校の取組 …… 14
品川学園の取組 …… 16
品川区が取り組む
「ウェルビーイング教育」 …… 20

品川区版

学びの羅針盤2030

私たちが望む品

子どもたち

つながる

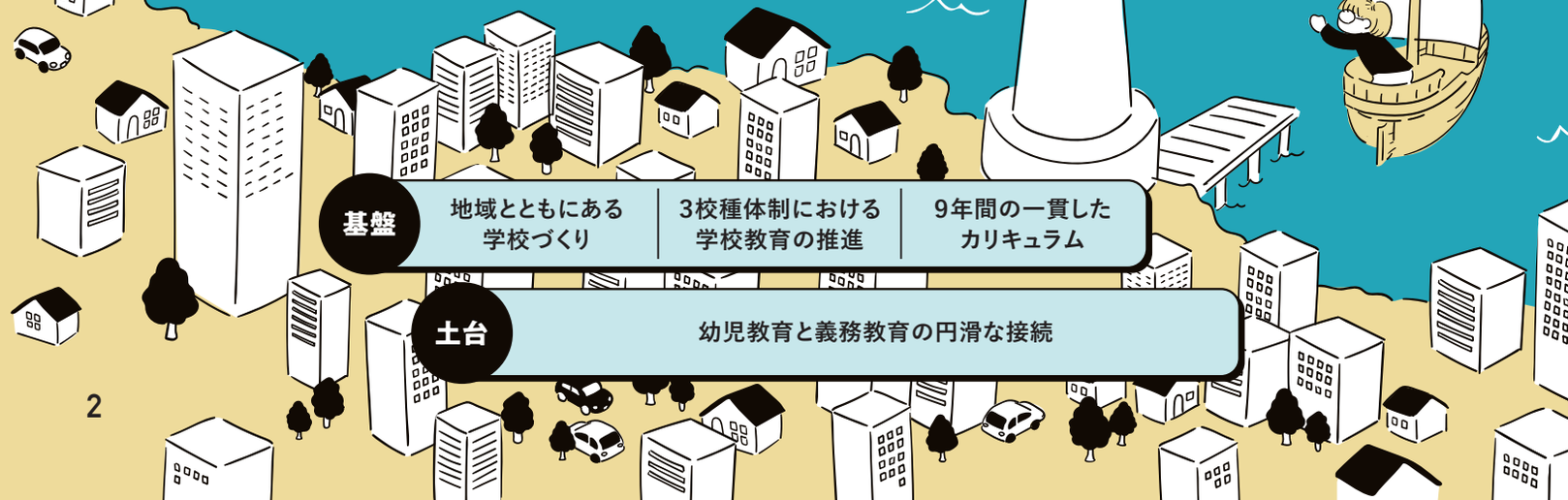
～みんなのウェルビー

子どもたちは、コミュニティの中で仲間・教師・家族・地域等、周囲の方々に囲まれ、協力しながら、自らも共生社会の担い手としての当事者意識をもってみんなのウェルビーイングを目指します。大海原の中、学びの羅針盤を頼りに周囲の人々が乗る船とともに自らの船を進めます。

子どもたちが、将来予測が困難で変化の激しい時代の中にあっても、自分らしく幸せな人生を送るためには、ウェルビーイングの実現に向けて自身が進む航路を自ら選択することができるように学ぶことが必要です。

区教育委員会は、子どもたちが自分自身の手で自らの航路を選択することができるよう、「OECDラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」をベースとした「品川区版学びの羅針盤2030」を作成しました。「品川区版学びの羅針盤2030」を手にした子どもたちが、見通しの困難な社会を乗り越えるための「知識やスキル、態度および価値観（コンピテンシー）」を身に付け、そして、「自ら目標を定め、学び、責任をもって行動する力（エージェンシー）」を発揮することで、共生社会の担い手となれるように育んでいきます。

子どもたちが主体的に目的意識を働かせ、自分自身の責任を果たしながら、周囲の人々と共に協力して高め合い、社会全体をよりよくするために学んでいくことができるよう、区教育委員会は、子どもの視点を尊重し意見を聴きながら、地域社会の一員である区民との協働により、取り組んでいきます。



基盤

- 地域とともにある学校づくり
- 3校種体制における学校教育の推進
- 9年間の一貫したカリキュラム

土台

幼児教育と義務教育の円滑な接続

川の未来（ビジョン）

の笑顔で
共生社会

ーイングを目指して～

重点施策

- ウェルビーイング教育の推進
- レジリエンス[※1]育成の推進
- ダイバーシティ＆インクルージョン[※2]を実現する教育の推進
- 個別最適で協働的な学びを実現する環境整備

※1 レジリエンス：直面した困難に対してたくましく、しなやかに立ち向かい、乗り越える能力

※2 ダイバーシティ＆インクルージョン：多様な人々がそれぞれの違いを認め合い、個々の特性を生かして活躍することができる状態

国と都の方針から創出された「品川教育ビジョン」

第4期教育振興基本計画（文部科学省）

▼

東京都教育ビジョン（第5次）

▼

品川区教育振興基本計画
「品川教育ビジョン」

「品川区版 学びの羅針盤 2030」が描かれた「品川教育ビジョン」は、国が掲げる「第４期教育振興基本計画」と東京都の「東京都教育ビジョン（第５次）」の内容を勘案するとともに、区で定める「品川区基本構想」「品川区長期基本計画」「品川区教育大綱」、および関連分野の個別計画等との調和と連携を図るものとして策定しました。

全校導入へのステップおよび推進体制の特徴

“ウェルビーイングの学び”の進め方

品川区のウェルビーイング教育は、すべての区立学校が、
それぞれの特色に合わせて実践可能にするための仕組みとして、３つの特徴を備えています。

特徴①　推進校制度による3年での全校導入

令和７年度より重点校（１校）、特別推進校（３校）、推進校（12校）を指定し、生徒指導や学級活動、市民科をはじめとする各教科において、子どもたちのウェルビーイングの理解、その実現に向けた資質・能力の向上に取り組んでいます。区教育委員会から教材や参考資料を配布し、指導案や実践例を共有するだけでなく、重点校・特別推進校では、区教育委員会が指定したウェルビーイング教育に造詣の深い講師が伴走するかたちで進めています。令和８年度、９年度も同数程度の指定校を新たに設定し、令和10年度には、品川区立の小学校・中学校・義務教育学校、全46校でウェルビーイング教育が実践されることを目指します。

重点校	これまで進めてきた学校独自の特徴やリソースを生かし、講師の伴走のもと、ウェルビーイング教育を大きく推進し、他校への情報共有を行う。 ［令和７年度］冨士見台中学校
特別推進校	提供される教材や資料を踏まえ、講師の伴走のもと、各校に即したかたちでウェルビーイング教育の年間指導計画、学習指導案を開発する。 ［令和７年度］伊藤小学校、大原小学校、品川学園
推進校	提供される教材や資料等を参考に、各校に即したかたちでウェルビーイング教育を実践する。 ［令和７年度］御殿山小学校、城南第二小学校、京陽小学校、第一日野小学校、第三日野小学校、芳水小学校、三木小学校、戸越小学校、上神明小学校、大崎中学校、荏原第一中学校、八潮学園

指定校による段階的展開

令和７年度（現状）
- 重点校：１校
- 特別推進校：３校
- 推進校：12校

令和８年度
- 特別推進校：３校
- 推進校：12校
（予定）

令和９年度
- 特別推進校：３校
- 推進校：12校
（予定）

令和10年度

令和11年度

３年計画で、区立の小学校・中学校・義務教育学校全46校に展開

しながわウェルビーイング教育 講師　**全体推進・伴走支援 担当**

渡邊淳司（NTT株式会社）
体験型ツールを開発し、ウェルビーイング・コンピテンシーを育む方法論を研究・実践。ウェルビーイング学会 理事。

平 真由子（金沢工業大学）
教育心理学やスポーツ心理学を基盤にウェルビーイング・コンピテンシーの実践的研究に取り組む。元中学校教員。

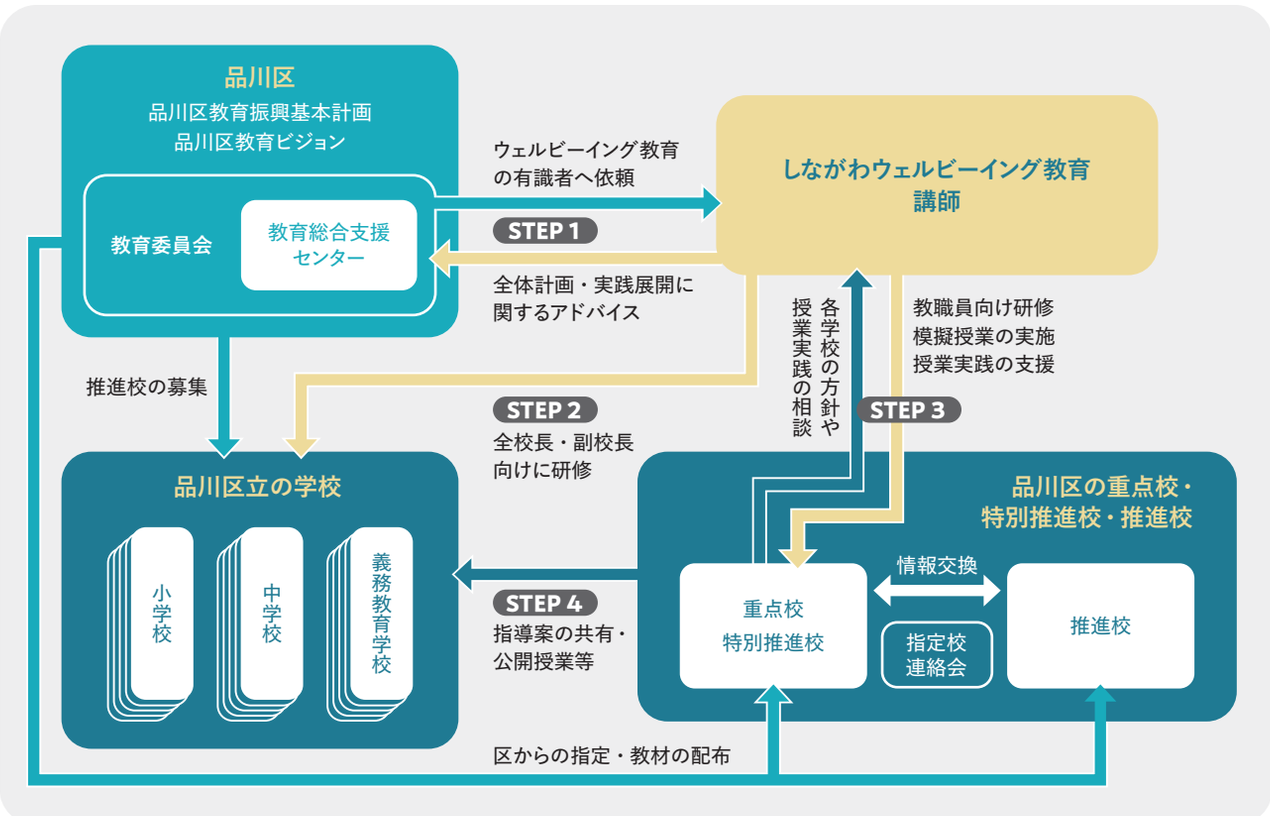
実践ツール 担当
石井方邦（NTT株式会社）

教職員ウェルビーイング 担当
佐藤美穂子（株式会社NTTアド）

コミュニティ 担当
坂倉杏介（東京都市大学）

特徴②　伴走型の推進体制

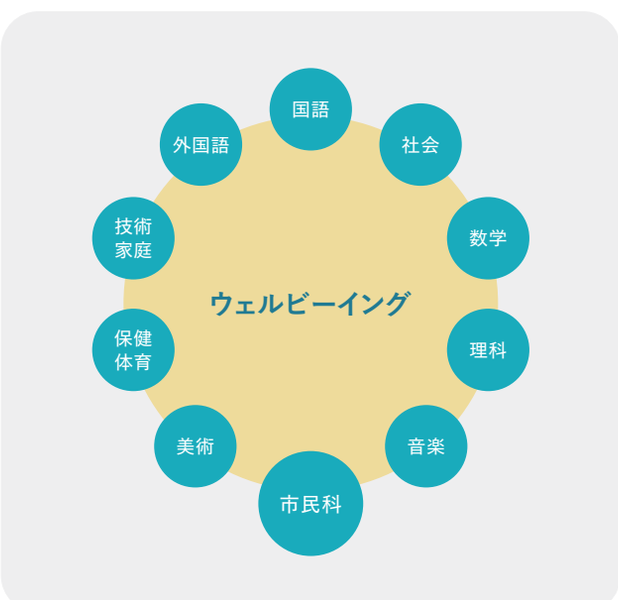
重点校、特別推進校では、各学校での教職員向け研修やカリキュラム、学習指導案に関する相談、児童・生徒に向けたウェルビーイングに関する模擬授業など、講師が活動に密に伴走するかたちで進められています。教職員自身がウェルビーイングの学びの意義や位置付けに納得し、児童・生徒に対して学びを実践していくことが、ウェルビーイングの学びを無理なく、持続可能なかたちで導入することにつながると考えています。



特徴③　各学校の特色や状況に即した推進

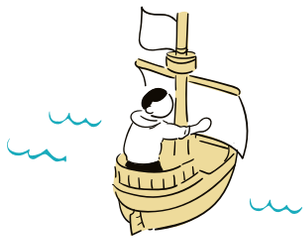
ウェルビーイングの学びは、これまでの教科指導、生徒指導とまったく異なる何かを導入することではありません。むしろ、これまで重視されてきた学びの考え方や取組を「一人ひとりのウェルビーイングを尊重し、それを実現する資質・能力を育む」という視点から、教科や学年を超えて価値付け、体系的に整理し直し、意識的に実践することだと言えます。そのため、各学校の風土や特色、経営方針、教職員の状況によって、進め方が異なることは自然なことです。

本事業では、学校の個別具体の特色や状況を尊重しつつ、その共通の基盤として、ウェルビーイングを据えています。多様な実践を通した検証や学校間での対話を通して、全校へ展開していきます。もちろん、学校間での共通言語が必要になり、それが「ウェルビーイング・コンピテンシー」という枠組みです。



導入のための考え方と実践方法

学びへの具体的な取り入れ方



実際の教育現場に、ウェルビーイングの学びをどのように取り入れていくのか、
その枠組みや授業設計のポイント、活用できるツール、評価の方法まで、その流れを紹介します。

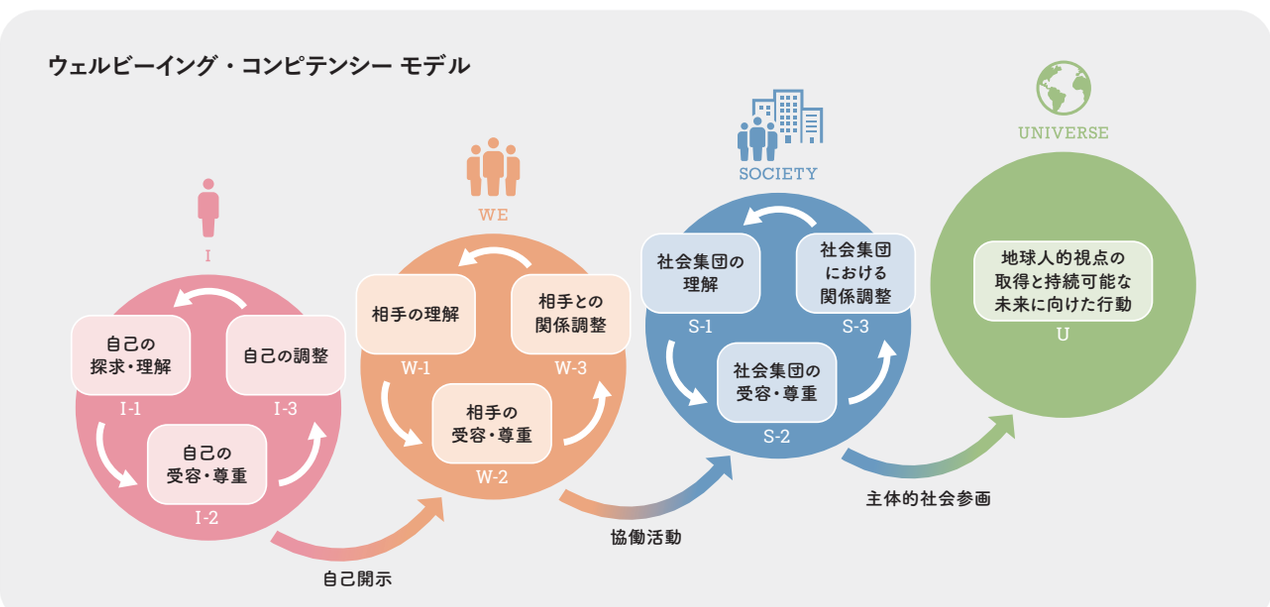
枠組みとなる「ウェルビーイング・コンピテンシー」

ウェルビーイングの学びには、大きく以下の２つのアプローチがあります。

① 児童・生徒が、ウェルビーイングに学ぶことができる環境を整える。
② 児童・生徒が、ウェルビーイングを実現するための実践的資質・能力を身に付ける。

これまで、①の学びの環境づくりに関して、さまざまなガイドラインが示されてきました。一方で、②の資質・能力の学びについては、その実践の指針は明確なかたちで示されてはいませんでした。

ウェルビーイングは人それぞれ異なるものであり、「すべての人に当てはまる絶対的な正解」はありません。大切なのは、学び手自身が、その時々のよい在り方を主体的に見いだし、協働的に実現する力を身に付けることです。「ウェルビーイング・コンピテンシー」は、その理念と実践を結ぶ枠組みとして、NTT社会情報研究所・金沢工業大学のウェルビーイングの研究の中で提唱されました。この枠組みは、これまでのさまざまな非認知能力の学びを包含し、品川区が参照しているOECDのラーニングコンパスとも親和性があるため、区の多様なウェルビーイングの学びを束ねる枠組みとしています。



ウェルビーイング・コンピテンシー モデル（NTT-KIT）※。「I／WE／SOCIETY／UNIVERSE」の４つのカテゴリーがあり、「I」は自分自身のこと、「WE」は近しい特定の人との関わり、「SOCIETY」はより広い不特定多数の他者を含む社会との関わり、「UNIVERSE」はより大きな存在との関わり、という関係性の範囲から分類されている。

コンピテンシーとは、知識の理解だけでなく、社会や問題に向かう態度や、具体的な状況での判断力・行動力まで含む、分野を限定しない実践的な資質・能力を指します。ここでは「ウェルビーイング・コンピテンシー」として、「I（自分）」「WE（身近な人々）」「SOCIETY（社会）」の３つのカテゴリーには、それぞれ「認知・感情・行動」の３つの視点から計９つのコンピテンシーを設定し、「UNIVERSE（自然・世界）」のカテゴリーには１つのコンピテンシーとして、合計10のコンピテンシーが設定されています。生徒指導や教科指導において、これらの中でどのコンピテンシーが育まれるかを意識しながら、学びを設計していきます。

※参考文献：『ウェルビーイング・コンピテンシー』（2025／東洋館出版社）

実践の設計「ターゲット型」と「アレンジ型」

導入として「ウェルビーイングとは何か？　なぜ学ぶのか？」といった基礎概念の学びがあります。続く実践には「ターゲット型」と「アレンジ型」があり、ターゲット型はコンピテンシーの獲得・向上を主たる目的とする教育活動で、「市民科」や日常の学級活動と親和性が高いです。「アレンジ型」は国語科や社会科などの教科内容の学びを第１の目標に掲げ、そこにウェルビーイングの考え方を副次的に取り入れた教育活動で、日常の授業や活動の中に無理なく取り入れられます。最後に、ウェルビーイングの学びを自分ごととして振り返ります。大切なことは、児童・生徒が自らのウェルビーイングに気が付き、共に振り返る機会をつくることです。

実践の設計

ウェルビーイングに関する基礎概念の学び（導入）

▼

ターゲット型実践	アレンジ型実践
コンピテンシーの獲得・向上を主たる目的とする教育活動	教科にウェルビーイングの考え方を取り入れた教育活動

▼

ウェルビーイング・コンピテンシー振り返りの実践

ウェルビーイングの言語化を促すツール

ウェルビーイングの学びを始めるに当たり、児童・生徒に、何もないところで「あなたのウェルビーイングに大切なものは何ですか？」と問うても、すぐには答えられないでしょう。そこで、自分や周囲の人々のウェルビーイングに意識を向け、言語化を促すツールとして、「わたしたちのウェルビーイングカード」を使用しています。各カードにはウェルビーイングの要因が１つ記載され、その一覧から自分のウェルビーイングに大切なものを選ぶという使い方をします。カードの言葉からしっくりくるものを選ぶというやり方なら、そこから、理由やエピソードを話しやすく、気軽に試すことができます。これまで実際に、小学３年生以上の授業で使用されています。

評価の方法

児童・生徒一人ひとりの学びを考えると、日々のウェルビーイングの学びのプロセスの中で、個別の振り返りを行うことが重要です。ただし、それと同時に、品川区がウェルビーイングの学びを推進する上で、事業全体としても何らかの評価指標を用意する必要があります。そこで、文部科学省の「全国学力･学習状況調査」から、ウェルビーイングやウェルビーイング・コンピテンシーと関連の深い設問を取り上げ、さらに、独自の設問を加えて評価指標としています。

もちろん、これらの結果は学校評価のためだけに用いるものではなく、本事業の効果を検証するための一つの資料として位置付けています。

質問項目の例（５～９年用／一部）

知識	「ウェルビーイング」という、言葉を知っていますか？
資質・能力（I）	自分には、よいところがあると思う。
資質・能力（W）	自分の身近な人とは、よい関係だと思う。
資質・能力（S）	地域や社会をよくするために、自分から活動できると思う。

冨士見台中学校の取組

DATA

分類	重点校
学年数	３学年
学級数	７学級
全校児童生徒数	251人
教職員数	23人

「ウェルビーイングを知り、慣れる」特別活動を中心とした多様な取組

冨士見台中学校では、生徒それぞれが、「今をウェルビーイングに生きる」ために、①ウェルビーイングを知る、②ウェルビーイングに慣れる、③ウェルビーイングを実現するための行動ができる、という３つの目標を設定しています。今年度は特に①と②に焦点を当て、特別活動を中心に取り組みました。

４月の早い段階で、教職員向け研修を実施し、学校担当者もオリジナル資料を作成して配布しました。「教科指導や学級活動、行事など、既存の教育活動にウェルビーイングの視点を入れてみる、まずはやってみる」という姿勢で、できるだけ具体的な実践方法を共有し、実施のハードルを下げることを心がけました。

具体的には、全学年で自己紹介カードに「自分の大切なウェルビーイング」を記載することから始めました。日直による朝の会でのウェルビーイング発表、学期始めや行事の目標設定・振り返りをウェルビーイングの視点から行うなど、これまでの活動に新しい視点を加えることで、自然なかたちでウェルビーイングの学びを広げています。

今年度は、生徒会組織の中に「ウェルビーイング委員会」を新たに設置しました。クラスや学校のウェルビーイング向上を目的に、日常生活の改善に向けた取組やイベントの企画・運営などを実践しています。初めての試みであり、当初は試行錯誤もありましたが、「自分たちで考え、行動する」という主体的な姿勢が、生徒の中に少しずつ育ち始めています。

また、図書館での図書紹介や、文化祭やコミュニティスクールでの活動、フォトコンテスト、地域と連携した「FUJIMIDAI Well-being Festival」など、ウェルビーイングに触れる機会が広がっています。こうしたさまざまな取組を通じて、ウェルビーイングが生徒・教職員・地域の共通言語として定着しつつあります。

成果と今後の課題　１年間の取組を通して、学校全体にウェルビーイングという言葉や考え方が浸透しつつあります。その動きは保護者や地域にも広がり始めています。生徒たちの中でも、ウェルビーイングは特別なものではなく、日常の会話や振り返りの場面に広がり、少しずつ当たり前のものになっています。今後は、取組を教育活動全体の中で、系統的・継続的に推進していくことが課題です。実践を重ねながら、冨士見台中学校らしいウェルビーイング教育を創造していきます。

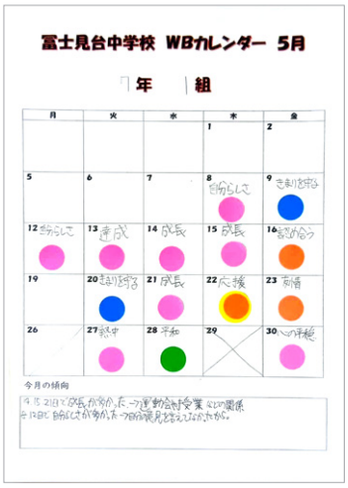
講師からのコメント　「やれることからやってみよう」という取組方針が、学校全体に創造的で主体的な活動を生み出していると感じました。ウェルビーイングになじむことからスタートし、ウェルビーイングを使う、実現するへと段階的に高めていく「見通し」をもって取り組んでいる点が印象的です。来年度以降の展開にも大いに期待しています。

実践事例

特別活動：日直の活動
「今日大事にしたいウェルビーイング」

［学年］全学年　［関連するコンピテンシー］I-1 W-1 S-1

毎日、日直が朝の会で「今日大事にしたいウェルビーイング」を発表。選んだウェルビーイングは日直日誌に記載され、日々の記録として積み重ねられる。これらの記録はウェルビーイング委員会によって整理され、カレンダー形式でまとめられる。カレンダーにすることで、クラス全体がどのようなウェルビーイングを大切にしてきたのか、時系列で可視化され、各月の傾向や変化をひと目で確認できる。



市民科「ウェルビーイングフォトコンテスト」

［学年］7年生　［関連するコンピテンシー］I-1 I-2 W-1 W-2 W-3

自分や周りの人、地域の中にあるウェルビーイングを写真で表現する取組。日常生活の中で感じた喜びや安心、誰かとのつながり、大切にしたい瞬間などを写真に収めることで、自分にとってのウェルビーイングとは何かに気付くきっかけをつくる。また、作品を校内に掲示し共有することで、他の人のウェルビーイングを知ることが可能になる。学校全体でウェルビーイングを意識する雰囲気づくりにもつながる取組となっている。

カードを使った本の紹介展示（図書館）

［学年］図書館来訪者　［関連するコンピテンシー］I-1 W-1 W-3

図書館司書と連携し、「わたしたちのウェルビーイングカード」の言葉をキーワードとした本の紹介や掲示を行っている。カードに示された価値観に関連する本を選ぶことは、生徒がウェルビーイングの視点から本に関心を持つきっかけとなる。生徒によるPOP作りも行っており、本の魅力と自分のウェルビーイングとの関わりを表現する取組となっている。本を読む・探すという日常的な営みに、ウェルビーイングの視点を加えるものとなった。

ウェルビーイングの学びに関わる活動記録

１年間で実施した「ウェルビーイングの学び」を確認するには、その活動をコンピテンシーと合わせて一覧表にまとめると把握しやすいと考えます。

学期ごと、または年間を通してのウェルビーイングの学びに関わる活動を、教職員向け、児童・生徒向けを合わせて時系列で並べています。表の項目には、活動の対象、時期、内容とともに、活動を通じて学ぶことができるウェルビーイング・コンピテンシーも併せて記載されています。I（自分）／WE（W：身近な人々）／SOCIETY（S：社会）という範囲と、それに関する「認知」（■）／感情（●）／行動（◆）を区別して記しています。例えば、相手の理解（W-1）のコンピテンシーであれば、Wの列に■を記入します。これらを一覧にすることで、１年間で育まれるコンピテンシーをひと目で把握できます。

※UNIVERSE（U：自然・世界）については今年度の取り扱いがないため省略しています。

ウェルビーイング教育重点校

冨士見台中学校
令和7年度のあゆみ

重点校である冨士見台中学校では、実践の実施のハードルをできるだけ下げて、「まずはやってみる」という姿勢で取り組みました。特に、日々の活動の中でウェルビーイングに触れる取組を行っています。

ウェルビーイングの学びの記録：1学期

WB＝ウェルビーイング

対象	開催時期	内容	I	W	S
教職員	４月11日	教職員向け研修（講師：渡邊氏、平氏）			
教職員	４月上旬	教員向けWB冊子の作成・配布			
全学年	年度初め	自己紹介カード	■	■	
全学年	通年	日直による朝の会でのWB発表	■	■	
WB委員会	通年	WB委員会の活動（WBカレンダーなど）			■ ◆
７年生（合同）	４月14日	WB導入授業（講師：渡邊氏）	■ ●	■	
全学年	５月24日	「一人一人が輝けるWBな運動会」の目標決め			■ ◆
７年生	６月２日～４日	移動教室の事後学習			■ ◆
７年生	７月14日	ターゲット型エクササイズ「Super Happy Birthday」		■ ◆	
WB委員会	７月26日	CSDAY（地域の方と意見交換）	■		■ ◆
図書館来訪者	通年	WBカードを使った推薦図書	■	■ ◆	

１学期は、４月に教職員研修や教員同士の情報交換を行い、ウェルビーイングの考え方や教育への取り入れ方について理解を深めました。これにより、教職員が共通の認識を持ち、ウェルビーイングの学びを進めるための基盤を早い段階で整えることができました。生徒にとっても、日直の活動や自己紹介、目標設定など日常の学校生活の中でウェルビーイングの考え方に触れ、少しずつ慣れていく時期となりました。また、ウェルビーイング委員会の活動や委員会のコミュニティスクールでの取組を通して、生徒が主体的にウェルビーイングを考え、学校や地域の中で実践していく可能性も見えてきました。

ウェルビーイングの学びの記録：2学期

WB＝ウェルビーイング

対象	開催時期	内容	I	W	S
7年生（クラス単位）	9月上旬	市民科の授業	■●	■	
全学年	10月上旬	合唱コンクールで大切にしたいWBを考える（クラス目標）	■		■ ◆
全学年 全教職員	10月上旬	校長企画展示「あなたのWBカラーは?」	■●		■
全学年	10月上旬	「冨士見台中学校をより良い学校にするために大切にしたいWBは?」	■		■ ◆
WB委員会	10月上旬	文化祭でのWBブース（取組紹介）			◆
7年生	11月17日	「WBフォトコンテスト」	■●	■●◆	
WB委員会	12月15日	校区協働委員会でイベントの話し合い	■	■	
8年生	12月上旬	市民科「生き方の座標軸」	■●◆	■●	
7年生（校長授業）	12月9日、16日	美術科「WBをイメージした平面構成」	■●		
保護者	10月25日	あなたが大切にしているWBは?（冨士見祭保護者向け企画）			

２学期は、市民科の授業に加えて、合唱コンクールや文化祭、ウェルビーイングカラーの展示、フォトコンテストなど、さまざまな活動にウェルビーイングの視点を取り入れて取り組みました。それぞれの活動の内容は異なりますが、「自分や周りの人のウェルビーイングを大切にする」という共通の考え方のもとで進められました。こうした多様な活動を通して、生徒はウェルビーイングを単なる言葉としてではなく、日々の学校生活や行事の中で実感しながら理解を深めていきました。ウェルビーイングが自分の行動や考え方を見つめるための一つの枠組みとして、少しずつ定着していく時期となりました。

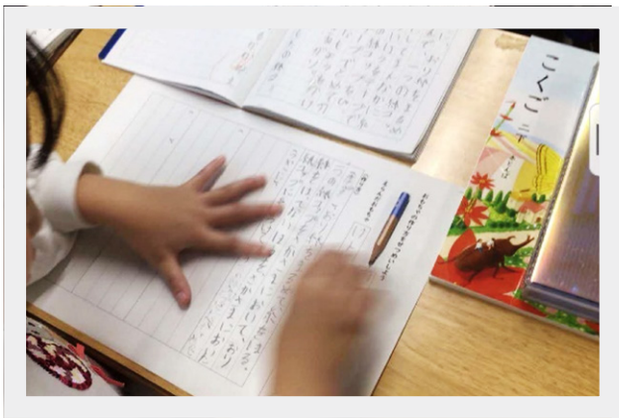
ウェルビーイングの学びの記録：3学期

WB＝ウェルビーイング

対象	開催時期	内容	I	W	S
7年生（クラス単位）		音楽科「WBオリジナルチャイムの作成」	■		■●◆
8年生（クラス単位）		市民科の授業	■	■●	
7年生	1月30日	鎌倉校外学習「WBフォトコンテスト」	■●	■●◆	
7年生（合同）	2月10日	多様性理解（障害）の出前授業			■●
学校・地域	3月14日	「FUJIMIDAI Well-being Festival」			■●◆
9年生	2月～3月	保健体育科「みんなが楽しめるWBな球技大会を考える」		■●◆	
7・8年生	3月下旬	球技大会「みんなが楽しめるWBな種目を考える」		■●◆	

３学期は、音楽科や保健体育科での実践、多様性理解をテーマとした出前授業など、ウェルビーイングの視点を取り入れた授業がさまざまな教科へと広がってきました。これにより、生徒は教科の学びを通して、自分自身や他者のウェルビーイングについて考える機会をより多く持つようになりました。さらに、生徒が中心となり、地域の方々にも参加を呼びかけたウェルビーイングをテーマとしたお祭り「FUJIMIDAI Well-being Festival」を開催しました。こうした活動により、ウェルビーイングを軸とした学校・生徒・地域のつながりが深まり、その広がりが一層実感される時期となりました。

伊藤小学校の取組



DATA

分類	特別推進校
学年数	6学年
学級数	18学級
全校児童生徒数	537人
教職員数	51人

国語科のアレンジ型実践とWB版学習指導案の開発

伊藤小学校では、児童の実態を踏まえ、国語科「書くこと」を中心とした学校研究に取り組むことを、年度当初に決めていました。そこにウェルビーイング・コンピテンシーの視点を加え、国語科の授業を基盤とする「アレンジ型実践」を全学年で展開しました(一部の学級では、「ターゲット型実践」も実施)。

学習指導要領を詳しく見ると、各教科の目標や内容の中には、すでにウェルビーイングの考え方が含まれていることが分かります。そこで、「各教科の指導の質を高めて授業を実践することで、おのずと、児童のウェルビーイング・コンピテンシーの獲得につながる」という仮説から、国語科の授業実践を重ねてきました。

実践では、国語科で学ぶ資質・能力を大切にしながら、単元全体で、国語の学びとウェルビーイング・コンピテンシーを結び付ける授業設計を行いました。

具体的には、低・中・高学年の部会に分かれて、それぞれ国語科の1つの単元を検討し、講師の助言を受けながら改善を進めました。その中で、従来の指導案にウェルビーイング・コンピテンシーの視点を明確に位置付けた「ウェルビーイング版学習指導案」を開発しました。

「国語科 ウェルビーイング版学習指導案」の特徴

① 単元の評価規準に加えて「関連するウェルビーイング・コンピテンシー」を明記。
② 研究主題に迫るための手だての中に、「ウェルビーイング教育の視点における手だて」を位置付け。
③ 単元の指導計画および評価計画に、「各時間で獲得を目指すウェルビーイングのカテゴリー」を記載。
④ 本時の目標に、「獲得を目指すウェルビーイング・コンピテンシーのカテゴリー」を明記。
⑤ 本時の展開においても、ウェルビーイング教育に関連する内容を具体的に記載。

成果と今後の課題　本取組を通して、教師が授業をウェルビーイングの視点から捉え直すことが可能となり、授業の進め方や学習活動、児童への声掛けなどに変化が見られました。一方で、学習指導案に記載する項目の内容や記載方法については、引き続き検討が必要であり、今後は区全体で共有できる学習指導案フォーマットの整備が課題として挙げられます。

講師からのコメント　国語科を軸にウェルビーイング教育を推進するという明確なテーマのもと、教員同士が指導案検討を丁寧に行っていた点が印象的でした。ウェルビーイングの視点を入れた学習指導案の開発は、来年度以降の区内各校における取組の参考となる成果であり、他校へと受け継がれながら、実践を通してさらに磨かれていくことを期待しています。

実践事例

国語科「おもちゃの作り方をせつめいしよう」

［学年］2年生　［関連するコンピテンシー］I-1 I-2 I-3 W-1 W-2

自分に合った方法で、説明する文章を書く力を育むことを目標とした。導入では、１年生担任からの「雨の日の休み時間を楽しく過ごす方法を知りたい」というビデオレターを提示して伝える相手を明確にし、「教室で簡単に作れるおもちゃの作り方を伝える」という目的を設定した。短冊による内容整理や動画を使った手順確認、書きながら思考を深める活動など、複数の方法を提示し、児童が自分に合った方法を選びながら、文章を書く力を育んだ。

時数	主な学習内容	関連する WBコンピテンシー
1時間	説明するおもちゃを選ぶ	I-1 W-1
2時間	作り方の写真を用意する	I-1 I-2
2時間	作り方の説明（中）を書く	I-2 I-3
1時間	文章を友達と読み合う	I-2 W-2
2時間	1年生向けの文章を書く	I-1 W-1
1時間	文章を友達と読み合う	I-2 W-2

国語科「食べ物のひみつブックを作ろう!」

［学年］3年生　［関連するコンピテンシー］I-1 I-2 I-3 W-1 W-2 W-3

食材を紹介する説明的文章の構成を工夫する活動を通して、伝え合う力を育むことを目指した。短冊で説明の順序を整理したあと、友達同士で助言し合う活動を行った。助言や対話を通して、自分なりの工夫をしたり、より分かりやすい構成へと整えたりした。自分の考え方を振り返るだけでなく、友達の工夫に気付く機会となるようにした。これにより、自己理解を深めるとともに、他者を受容・尊重しながらよりよい表現を共に探る姿勢を育んだ。

時数	主な学習内容	関連する WBコンピテンシー
1時間	文章を書く計画を立てる	I-1 I-2
2時間	書くための情報を集める	I-1 I-3
1時間	文章の組み立てを考える	I-3 W-1
3時間	組み立てを基に文章を書く	I-2 W-2
1時間	友達と文章を読み合う	I-1 W-3

国語科「新聞社に意見文を投稿しよう!」

［学年］5年生　［関連するコンピテンシー］I-1 I-2 I-3 W-1 W-2 W-3 S-1 S-2 S-3

新聞社への意見文投稿を単元のゴールに位置付け、社会に寄与するという目的意識のもとで学習を展開した。社会に自分の意見を発信することを前提に、文章を構想・推敲する過程を通し、多様な立場や考えを想定しながら表現を調整する姿勢を育んだ。これにより、社会集団の理解および受容・尊重、関係調整につながるコンピテンシーを育んだ。最後に、書いたものに対して相互にコメントを交わし、自己および相手の受容・尊重を育む活動も行った。

時数	主な学習内容	関連する WBコンピテンシー
1時間	学習計画を立てる	I-1 S-1
1時間	根拠を調べ、構成を考える	I-1 S-2
1時間	意見文を書く	I-1 I-3
1時間	グループで文章を読み合う	W-1 W-3
1時間	助言を基に文章を改善する	I-3 S-3
1時間	感想交流し、よさを見付ける	I-2 W-2

大原小学校の取組

DATA

分類	特別推進校
学年数	6学年
学級数	12学級
全校児童生徒数	284人
教職員数	39人

児童向けウェルビーイングアンケートの開発

大原小学校では、学校全体でウェルビーイング教育を推進する上で、まず、講師を招聘して教職員を対象とした校内研修を８月に実施しました。研修では、「ウェルビーイングとは何か？」という基礎から始め、体験を交えながら理解を深めました。その後、各教職員が「できそうなところからやってみる」という方針で、日々の活動にウェルビーイングの学びを取り入れていきました。

児童に向けては、９月の全校朝会で、校長からウェルビーイングについて講話を行い、全学年の活動として「２学期の目標」をウェルビーイングの視点から設定しました。カードを使うことで、視野を広げて考えたり、友達の考えに興味を持ったりするきっかけとなりました。

同月、５年生に「ウェルビーイングの導入授業」を公開授業として実施しました。講師が授業を担当し、ワークを通して、自分の大切なものについて考えました。また、「校長先生の大切なもの」を考える時間ももちました。この授業は、児童がウェルビーイングという言葉や考え方に具体的に触れるきっかけとなりました。

１年生は登校したら、自分の気分や感情を表すキャラが描かれた「フィーリング・キャラクターズ」を使って考え、朝の会で、友だちに伝え合いました。ツールがあることで、自分や相手の気持ちに気付けるようになるとともに、担任も児童の状態を把握可能になり、学級経営や個別の支援に生かすことができました。

また、児童の学びの実態を捉えるため、ウェルビーイング・コンピテンシーに関する小学生版質問票を作成しました。作成に当たっては、担当者が「ウェルビーイング・コンピテンシーマトリクス（NTT-KIT 2024年版）標準質問一覧」を参考に原案を作成し、講師と意見交換しながら内容を精査しました。発達段階に応じて、低学年用・中学年用・高学年用の３種類を用意しました。

「フィーリング・キャラクターズ」を使って今の気分を伝え合う取組。

成果と今後の課題　ウェルビーイング・コンピテンシーを自身で振り返るアンケートを実施したことで、子どもたちの状態を可視化でき、学級づくりや授業づくりを見直すきっかけとなりました。これまで気付きにくかった子どもの様子に目を向けられたことは、大きな成果です。一方で、子ども自身の振り返りの方法など、どのようにアンケート結果を学級経営や個別支援に生かすことができるのか、その活用方法は今後の課題です。

講師からのコメント　これまで大原小学校が大切にしてきた教育活動を基盤に、全体目標を「自分を深く理解する」「人との関係をよくする」と定め、無理なくウェルビーイングの視点を取り入れている点が印象的でした。また、児童が自身のウェルビーイング・コンピテンシーの状態を把握できるアンケート開発に取り組んだことも、区内小学校の参考になる取組だと感じました。

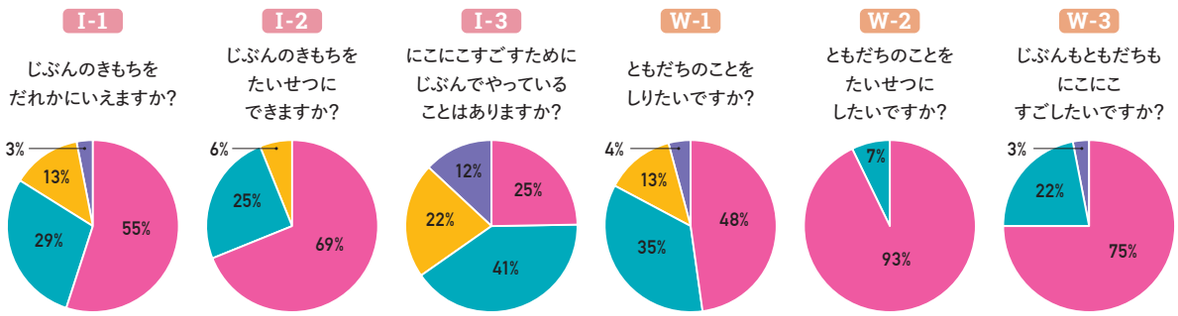
実践事例

ウェルビーイングアンケート（低学年用）

低学年用の質問票は「I」と「WE」の行動に関する６つの質問から構成される。回答は（④とてもあてはまる／③だいたい、少し／②あまりできない／①まったくできない）の４段階から選択する。アンケートは「Microsoft Forms」を利用して行い、回答時間は２～５分程度かかった。

２年生の回答結果の例

●とてもあてはまる　●だいたい、少し　●あまりできない　●まったくできない



ウェルビーイングアンケート（中学年用／高学年用）

中学年用と高学年用は、「I」と「WE」の認知（I-1、W-1）・感情（I-2、W-2）・行動（I-3、W-3）、それぞれに対して３問ずつ、計18問で構成。回答は同じく４段階で設定した。中学年用の質問文は、高学年用より平易な表現にし、ウェルビーイングという言葉は使用せずに作成した。今後は、児童がより答えやすく、振り返りできるかたちを検討していく予定。

中学年用の質問文の例

	態度	知識	技能
I-1	自分の気持ちや大切にしていることにきょうみはありますか？	自分の気持ちや大切にしていることがわかりますか？	自分の気持ちや大切にしていることを人に話すことができますか？
I-2	ありのままの自分を大切にしたいですか？	自分の気持ちや大切にしていることが、どうして大事なのかわかりますか？	自分の気持ちや大切にしていることを、大事にできますか？
I-3	自分が気持ちよく過ごしたいですか？	自分が気持ちよく過ごすために、どうしたらいいかしっていますか？	自分が気持ちよく過ごすために自分から行動できますか？

	態度	知識	技能
W-1	周りの人（家族や友達）のことにきょうみはありますか？	周りの人の大事にしていることを知っていますか？	周りの人の大事にしていることを、話すことができますか？
W-2	周りの人のことを大切にしたいと思いますか？	周りの人が自分とちがっても、大切にすることが、どうして大事なのかわかりますか？	周りの人の話をよく聞いたり、自分とちがっても否定したりしないことができますか？
W-3	自分も周りの人も気持ちよく過ごすために、自分ができることをしたいですか？	自分も周りの人も気持ちよく過ごすには、どうしたらいいかしっていますか？	自分も周りの人も気持ちよく過ごすために、自分から行動できますか？

品川学園の取組

DATA

分類	特別推進校
学年数	９学年
学級数	37学級
全校児童生徒数	1139人
教職員数	155人

市民科の計画をウェルビーイングの視点で見直し

品川学園では、しながわウェルビーイング教育が始まる以前の令和６年度から、ウェルビーイングの視点を学びに取り入れてきました。令和７年度には、特別推進校に指定され、市民科の全体計画をウェルビーイングの視点から見直しました。

まず、市民科の目標を「自他のウェルビーイングを尊重し、よりよく生きるための価値や行動を主体的に考え、実践する力を育てる」と定め、市民科を中心にウェルビーイング教育を推進しました。カリキュラム部の教員が、講師からウェルビーイングやウェルビーイング教育について学び、その後、各教科でウェルビーイング・コンピテンシーの視点を取り入れた授業づくりを進めました。こうした取組は市民科にとどまらず、他教科でもターゲット型／アレンジ型の実践で挑戦しました。

３年生の国語科では、カードの言葉の意味を調べ、自分にとって大切なカードを選び、紹介文を作成しました。友達との交流を通して、異なる考えに触れたり、友達のよさに気付いたりする活動につながりました。また、保健体育科（８年）や美術科（８～９年の特別支援学級）でも、ウェルビーイング・コンピテンシーの育成を意識した授業を行いました。さらに、４年生では、保護者会の際にカードを用いて保護者自身が大事にしていることを選んだり、「わが子はどのカードを大事にしているか」と質問したりして、とてもよい雰囲気で保護者会を実施することができました。

また、ウェルビーイングをテーマとした公開授業も２回実施しました。その実践の様子を、区内の多くの教職員と共有しました。授業終了後には、品川学園の教職員と公開授業の見学に集まった品川区内の教職員による全体会も実施され、担当教諭による教育実践の報告や参加者間での意見交換のほか、講師による講話なども行われました。

保健体育科「ウェルビーイングなハンドボール」の公開授業の様子。

成果と今後の課題　ウェルビーイングという考え方を児童・生徒と共有することで、指導が円滑になる場面が増えました。また、カードの活用により、児童・生徒の語彙や自己表現の幅が広がり、他者理解や多様性理解の深化が見られました。さらに今後は、ウェルビーイングの視点を学校全体へ広げ、系統的な取組を推進していくことが課題として挙げられます。

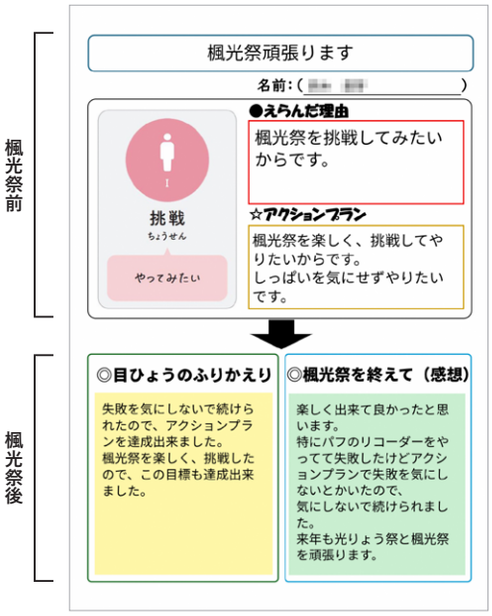
講師からのコメント　教育課程全体をウェルビーイングの視点から見直すことから着手された点が意義深い取組です。義務教育学校の規模を踏まえ、全体方針を共有した上で学年や教科の特性を生かして実践を積み重ねる方法は、学校全体への着実な浸透につながるものと感じました。来年度以降、さらにウェルビーイング教育が深化していくことを確信しています。

実践事例

市民科「楓光祭を成功させよう」

［学年］3年生　［関連するコンピテンシー］ I-2 I-3

音楽を中心とした学習成果発表会「楓光祭」について、ウェルビーイングカードの言葉を使っての目標決めと、振り返りを行った。光椋祭（運動会）でも同様の実践を行ったが、楓光祭では振り返りに重点を置いて実施。目標達成のためのアクションプランを立てたこと、それらに関する振り返りを記述したことにより、行事を通して、児童が自身の成長を実感できる機会となった。Iのコンピテンシーを狙った取組と考えていたが、廊下に掲示したことにより、お互いの成果を見ながら「あー、そうやって考えていたのか」などの会話があり、Wのコンピテンシーが育まれる様子も見られた。



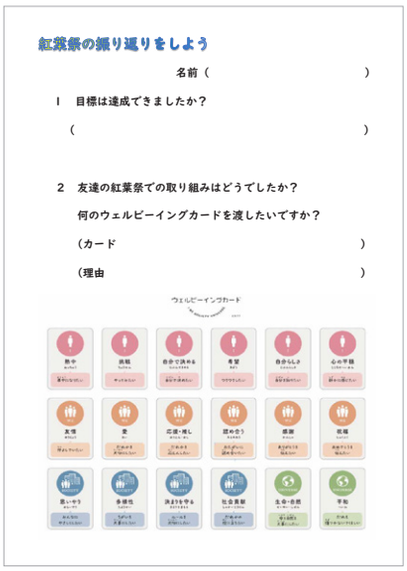
目標とアクションプラン、振り返りカード。

廊下での掲示の様子。

市民科「みんなちがってみんないい」（公開授業）

［学年］特別支援学級（6組）8・9年生
［関連するコンピテンシー］ I-3 S-3

紅葉祭（合唱コンクール）を振り返りつつ、自分のよいところと友達のよいところを挙げ、自己肯定感をテーマにした授業を行った。「わたしたちのウェルビーイングカード」や「フィーリング・キャラクターズ」を用いて紅葉祭を振り返り、自他のよさを伝え合いながら、今後の行動を宣言した。活動を通してポジティブな語彙が増え、他者を認める言葉を使う生徒が増加した。回を重ねるごとに、さまざまな言葉を使った目標設定や振り返りが見られるようになった。



振り返りのシートでは、相手に渡したいカードを選び、よさを伝える。

ウェルビーイング教育特別推進校
令和7年度のあゆみ

特別推進校である、伊藤小学校、大原小学校、品川学園のウェルビーイングの学びの年間記録です。
各学校が自校の状況に合わせ、それぞれ特徴のある取組を行っています。
これらに先だって、区内全校に向けて5月に事業説明会、6月に校長・副校長研修を実施。
9月と2月の教務主任会では、ウェルビーイングの学びに関する説明や報告がありました。

伊藤小学校のウェルビーイングの学びの記録

WB＝ウェルビーイング

対象	開催時期	内容	I	W	S
教職員（管理職）	６月13日	講師との全体方針に関する打ち合わせ			
教職員／校区教育協働委員	８月29日	教職員・地域向け研修（講師：平氏、渡邊氏）			
校内研究 中学年分科会	９月24日	講師との国語科指導案検討「書くこと」	■●◆	■●◆	
校内研究 低学年分科会	10月22日	講師との国語科指導案検討「書くこと」	■●◆	■●	
校内研究 高学年分科会	11月26日	講師との国語科指導案検討「書くこと」	■●◆	■●◆	■●◆

６月に講師との意見交換を行ってウェルビーイング教育の進め方を検討し、ウェルビーイングの考え方を日常の授業の中で無理なく取り入れていくことの重要性が共有されました。その後、校内での議論を重ねた結果、２学期以降は特に国語科の授業づくりにウェルビーイングの視点を取り入れていく方針を定めました。具体的には、低・中・高学年の各部会で単元構成や学習活動について検討を重ねました。その過程では、講師から助言を受けながら指導案を見直し、改善を進めました。

大原小学校のウェルビーイングの学びの記録

WB＝ウェルビーイング

対象	開催時期	内容	I	W	S
教職員（一部）	６月10日	講師との全体方針に関する打ち合わせ			
教職員	８月29日	WB校内研修（講師：平氏、渡邊氏）			
教職員	11月	安心して学べる教室環境作り研修			
全学年	９月８日	全校朝会	■	■	■
全学年	９月	２学期のめあて作り（WBカード）	■	■	■
全学年	学期始め／学期終わり	WBアンケートの実施	■◆	■◆	■◆
１年生	通年	朝の会で今日の気分をペアで共有	■●	■●	
５年生	９月17日	講師によるWB導入授業（公開授業／講師：平氏、渡邊氏）	■	■	■◆
５年生	11月	学芸会の目標決め	■		■

本格的な始動は、８月末の教職員研修と、９月初めの全校朝会での校長講話で、児童はウェルビーイングという言葉やその意味に触れる機会をもつことができました。その後、１年生の朝の会では自分の感情を共有する活動を行い、日常の中で自分の気持ちに目を向ける経験を重ねました。５年生を対象に講師による導入授業を実施し、体験的な活動を通してウェルビーイングについて考える機会を設けました。全学年で行ったウェルビーイングアンケートでは、児童一人ひとりの状態や感じ方が把握できました。

表の見方：学期ごと、または年間を通してのウェルビーイングの学びに関わる活動を、教職員向け、児童・生徒向けを合わせて時系列で並べています。表の項目には、活動の対象、時期、内容とともに、活動を通じて学ぶことができるウェルビーイング・コンピテンシーも併せて記載されています。I（自分）／WE（W：身近な人々）／SOCIETY（S：社会）という範囲と、それに関する「認知」（■）／感情（●）／行動（◆）を区別して記しています。

※UNIVERSE（U：自然・世界）については今年度の取り扱いがないため省略しています。

品川学園のウェルビーイングの学びの記録

WB＝ウェルビーイング

対象	開催時期	内容	I	W	S
管理職・カリキュラム部	5月30日	WB研修（講師：平氏）			
管理職・カリキュラム部	7月25日	WB研修（講師：平氏、渡邊氏）			
カリキュラム部	9月	WBコンピテンシーを踏まえた市民科全体計画の提案			
全職員・区内研修参加者	10月31日	WB研修（講師：平氏、渡邊氏）			
3年生	5月	国語科「国語辞典を使おう／もっと知りたい友だちのこと」	■	■	
3年生	7月	市民科：市民科地区公開講座「命の大切さ」	■●	■●	■
7年生	7月	市民科：市民科地区公開講座「自分の意思を持つことの大切さ」	■	■	■
3年生・特別支援（6組）	9月	WBカードを用いた1日の目標設定と振り返り（朝の会・帰りの会）	◆	◆	
6組	10月	市民科「東京都陸上大会の振り返り」「合唱コンクールの目標設定」	■●	■●◆	◆
3年生	10～11月	市民科「運動会での目標設定・振り返り」	■●◆	■◆	■●
8年生	10月31日	保健体育科「WBなハンドボール」（公開授業）	■	■◆	
特別支援（6組）8・9年生	10月31日	市民科「合唱コンクールの振り返り」（公開授業）	◆	■●◆	◆
特別支援（6組）	11月	美術科「相手を思ってグラデーションカードを作ろう」		■●◆	
1年生	11月	市民科「すきなところ　なりたい自分」	■		
2年生	12月	市民科「すきなところ　なりたい自分」	■	■	
3年生	1月	市民科「楓光祭の振り返りをしよう」	■◆		
特別支援（6組）	11～1月	毎日のクラスの目標決めと振り返り	◆	■◆	◆
8年生	11～1月	保健体育科「WBなサッカーボール・ソフトボール」	■	■◆	
保護者（4年生）	9月	保護者会時にWBカードを用いたアイスブレイキング等を実施			

品川学園では、カリキュラム部を中心に、市民科のグランドデザインを見直すとともに、ウェルビーイングの学びを他の教科にも広げる取組を進めています。令和7年度以前からウェルビーイングの学びを取り入れており、7月にはその取組を紹介する公開授業を実施しました。さらに、10月の公開授業では、市民科に加えて保健体育科や特別支援学級（6組）でも実践を行い、教科や学級の特性に応じた多様な取組を共有しました。学びの記録を振り返ることで、市民科を軸としながら、各教科の特性に応じてウェルビーイングの視点を取り入れ、学園全体で一貫した学びが広がりつつあることが分かります。

品川区が取り組む「ウェルビーイング教育」

品川区では、品川区教育振興基本計画「品川区教育ビジョン」に基づき、「子どもたちの笑顔でつながる共生社会～みんなのウェルビーイングを目指して～」の実現に向け、令和７年度から「ウェルビーイング教育」の取組を進めています。

ウェルビーイングは、特定の教科や授業等で育まれるものではなく、友人関係、教師、家族、地域とのつながりはもとより、学校生活全体の安心感といった日常的な関わりの中で形成されるものであり、学校が子どもにとって「居たい場所」となるための基盤と考えています。

品川区では、「ウェルビーイング教育」を、「児童・生徒がウェルビーイングに生きるために必要な資質・能力を育てる教育」として、生徒指導や不登校支援とを分断せず、学校の日常を支える一体的な取組として位置付けています。また、ウェルビーイングを教えることを目的とするのではなく、授業や行事を通して子どもたちが気付き、振り返り、自他の理解を深められる学びの在り方を重視しています。

「ウェルビーイング教育」の推進にあたっては、区内46校を一律に進めるのではなく、「重点校」「特別推進校」「推進校」という段階的制度を設け、指定校での実践と検証を重ねながら、区全体へ広げていく仕組みを構築しました。その中で、伴走支援や研修、教材提供、授業公開など、多面的な支援を行い、学校任せにしない体制づくりを進めています。

また、児童・生徒のウェルビーイングの把握については、既存のアンケートを改善し、比較や競争を目的とせず、一人ひとりを理解するためのツールとして活用しています。評価に関しても、ウェルビーイングを新たな評定項目とするのではなく、学びの成長を捉える“レンズ”として位置付け、教科目標との混同を避けながら整理を進めています。

「ウェルビーイング教育」に完成形はありません。だからこそ、学校現場の実践を尊重しつつ、子ども・保護者・地域・専門家との対話を重ね、試行錯誤しながら、品川区として「みんなのウェルビーイング」の実現に向けて歩み続けてまいります。

品川区教育委員会
教育長　伊﨑みゆき

しながわウェルビーイング教育のあゆみ
令和７年度

発行月：2026（令和８）年３月
発行：品川区教育委員会
編集：品川区 教育委員会事務局 庶務課